政務活動報告書

令和７年５月２３日

〔会派名：喜働　〕

代表者氏名	川合　　滋　　印	記録者氏名	幸松　孝太郎　　印
研修者氏名	幸松　孝太郎		
研　修　日	令和７年５月１３日（火）		
研　修　先	大阪府：大阪・関西万博会場		
目　　的	今回の研修では、２０２５年日本国際博覧会協会主催の「自治体向け研修」に参加して、地域における万博の活用等に関する研修を受け、大阪・関西万博開催の効果を波及するために、地元の地域経済活性化の活用について多角的に考えること。		

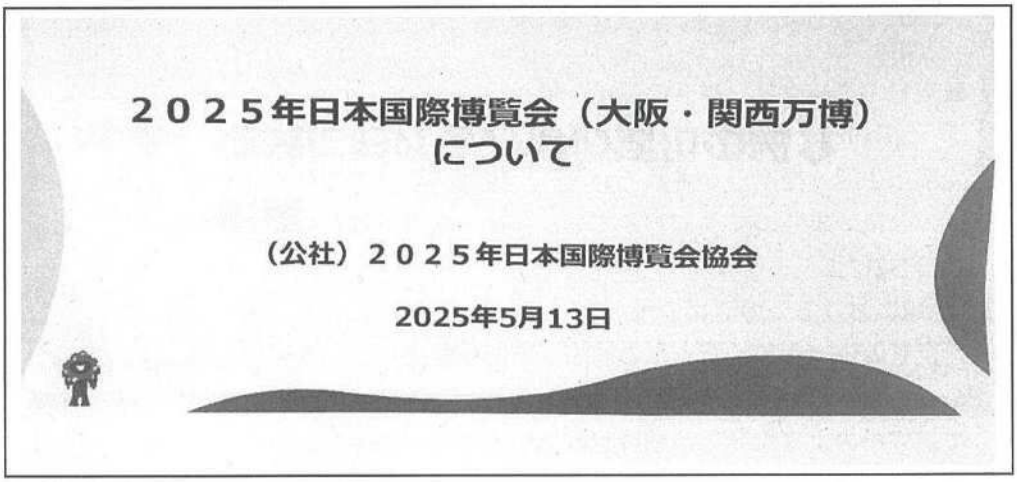
研修概要

（1）開催要領

１．自治体・議員向け説明会

下記５５Ｐ資料により、説明を受ける。（資料：別紙）

表紙



２．大阪・関西万博の開始１ヶ月の状況

大阪・関西万博が開幕した４月１３日～5 月 10 日までの 4 週間の一般来場者数は、241 万 9509 人と万博協会は発表した。また、来場者を対象にしたアンケート結果も公表。満足したかどうかについて「そう思う」「ややそう思う」を合わせて 79．7%に上った。

万博協会は会期中に 2820 万人の来場を見込んでおり、1 日平均約 15 万人に訪れてもらう必要がある。これまでの 1 日当り最多は開幕日の約 12 万 4 千人であり、今後増加するとの認識を示しているが、課題としてあげていることは、バスで西ゲート側に着く「パーク・アンド・ライド」の利用促進が必要だとの考えを示している。加えて、雨対策として会場での雨具の販売強化や、雨宿りできる休憩所の情報発信を充実すること。また、熱中症などの暑さ対策にも力を入れる他、閉館しているネパールやアンゴラの早期開館を目指している。

名張市議会 受 7.6.-5 第　号

（2）視察のまとめ

1．今回の視察では、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとする 2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）を訪れ、主に以下の展示や空間を視察した。

■「いのちといのちの、あいだに」をテーマとする日本館

日本館では、生命の尊さと未来社会における共生の在り方を深く考えさせられる展示がなされていた。伝統文化と先端技術が融合し、心を動かすような演出が特徴であり、デジタル映像や空間音響を駆使した展示は、まさに「未来社会のデザイン」を体現していた。特に、個々の「いのち」が響き合うという思想は、地域社会における「つながり」の大切さにも通じ、本市のまちづくりにおいても活かすことができる重要な視点であると感じた。

■大阪ヘルスケアパビリオン

大阪府市が共同で出展するこのパビリオンでは、健康・医療の最先端技術の展示とともに、誰もが健康に暮らせる社会の構築に向けた具体的な提案が見られた。本市でも超高齢社会の課題がある中、「予防」「共助」「テクノロジーの活用」といった切り口での施策展開のヒントが得られた。

■アメリカ館

アメリカ館では、宇宙開発や AI、医療テクノロジーを通じて未来社会の可能性を発信していた。日本館が「共生」をテーマにした内省的なアプローチであったのに対し、アメリカ館は革新性と挑戦の精神に満ちた内容で、万博ならではの多様性と価値観の交錯を体験することができた。

■大屋根リングのウォーク体験

万博会場の象徴的存在である「大屋根リング」を実際に歩く体験は、会場全体を一望できるだけでなく、万博の理念やデザインの意図を体感的に理解できる貴重な機会であった。建築としての象徴性と、来場者をつなぐ回遊性の融合は、名張の公共空間づくりや観光導線の設計にも参考になると感じた。

■空飛ぶクルマと「幸せの都市」展示

「Society5.0 が目指す未来の都市」をテーマに、空飛ぶクルマの実機展示や、AI・IoT 技術による都市生活の提案がなされていた。「便利さ」だけでなく「幸せ」を軸にした都市像の提示は、本市の今後のまちづくりにおいても、福祉・環境・教育などを横断的に捉えた施策の重要性を再認識させられた。

2．地域における万博活用の視点

視察の中で印象的だったのは、「万博＋観光」という発想を通じて、地域全体への波及効果を創出しようとする万博協会の狙いであった。4 つの地域における効果として、地域での万博の活用を通じて、以下のような効果が期待されていることが確認できた。

① 地域での消費額の拡大

→ 来訪者の宿泊・食事・交通などを通じて地域経済を刺激

② 市内企業の商品やサービスの PR

→ 展示会やプロモーションを通じた販路拡大のチャンス

③ リピーターや新規ファンの獲得

→ 地域の文化や人との接点づくりによる継続的関係の構築

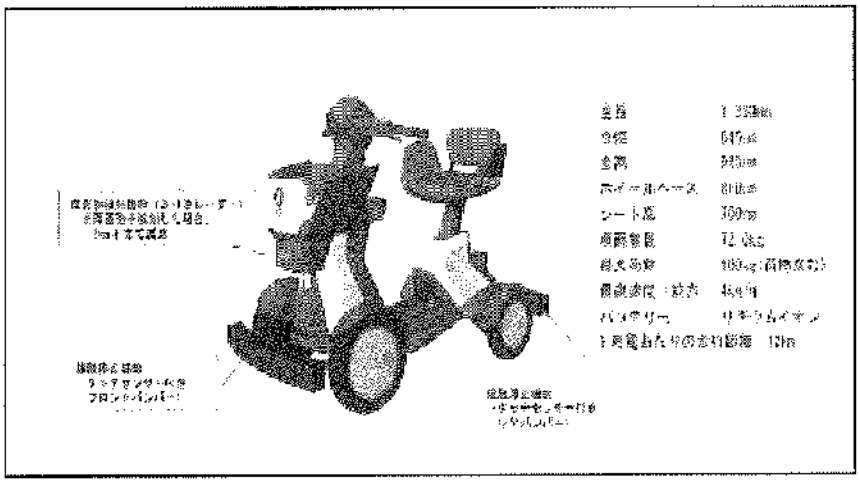
④ 観光受入体制の整備と投資促進

→ インフラ・人材育成への投資を呼び込み、地域活性化へ

本市においても、今後の観光戦略や地域ブランド発信において、「万博の波及効果をどう取り込むか」は極めて重要なテーマであり、早期から市内関係者と連携した準備・展開が求められる。

3. パーソナルモビリティ「e-SNEAKER」体験

会場内の移動には、ダイハツ製の電動カート「e-SNEAKER」を抽選により試乗した。コンパクトながら快適な走行性と操作性で、広大な会場をスムーズに巡ることができた。こうしたモビリティ技術は、高齢者や障がい者に優しいまちづくりに活かせる可能性があり、名張市の公共交通や移動支援の施策にも参考となる。



4. 所感

今回の視察を通じて、「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博のテーマが、大都市や最先端技術だけの話ではなく、私たちのような地域の暮らしや文化、自然の中にこそ、その本質があることを強く感じました。

日本館で紹介されていた「いのちといのちの、あいだに」というメッセージや、大阪ヘルスケアパビリオンで見た健康と福祉の先進技術、さらには空飛ぶクルマや海外パビリオンでのまちづくりの展示など、どれも未来を考えるヒントにあふれていました。

また、関西パビリオンにおいて、三重県が名張市のシンボルでもある「オオサンショウウオ」を用いた展示を行い、多くの来場者の関心を集めていたことは、名張の自然や魅力を発信する可能性を実感させるものでした。

こうした経験から、名張市のまちづくりにおいても、地域に眠る魅力や資源を「未来へつなぐ力＝デザイン力」として活かし、市民一人ひとりが主役となって参加できるようなまちのかたちを描いていくことが大切だと感じました。

今後も、万博のような全国的な機会を通じて得られる学びや気づきを、市の政策や地域づくりにしっかりと活かしていきたい。

以上